

前回、竹内園芸の山中高志氏との対談で、「誇り高き百姓になりたい」と語ったジェイ・ウィングファームの齋藤碌氏は、同時に、農家の取り組みに対する地域社会の認識や、農産物に対する消費者の捉え方に疑問も抱いているという。今回2人は、そうした点について、それぞれの立場から考えをぶつけ合った。

山中 齋藤さんは、海外農業研修で見た米国の農家は「誇り」を持っていて、そこに日本の農家との違いを感じたと言っていました。実際にこれまで農業を続けてみて改めて感じたことは何かありましたか？

齋藤 農家は農産物を生産して販売しているだけではなく、地域社会に貢献するような事もたくさんしているんですよ。おそらく日本の第1次産業全般に言えることだと思いますが、そういったことが評価されていない状況には疑問を感じますね。

山中 例えば、どういったことがあるんですか？

齋藤 この地域の水路は市街地にもつながっていて、大雨が降ると溢れて水害が起きかねないんです。日頃から百姓が排水係を決めて管理してはいるんですけど、自分もその補助係をしてみると、手間もかかるし、常に天候を気かけなくてはいいけな



リレー訪問 農場に勤めると誇りと夢

第23回

農家の社会貢献 に対する評価

……の巻

今月のゲスト

山中 高志 (30歳)

出所備

身：広島県広島市
属：(有)竹内園芸（徳島県板野町）
考：1977年生まれ。2002年、徳島大学大学院エコシステム工学専攻修了後、建設機械の製造・販売を行なうコベルコ建機(有)入社。海外部品グループに配属。07年、野菜苗・花苗を生産する(有)竹内園芸に入社。現在、IT・システム担当。

い役割なんですよ。

山中 僕の実家は農家なので、水路や畦草の管理もしていました。その大変さはわかりますね。

齋藤 畦草の管理にしても、草刈機に燃料費をかけてやったところで農家の収益が上がるわけではないんですよ、それでもやるのは、地域の人や隣の田に迷惑をかけたくない、そういう気持ちで農家にはあるからなんです。にもかかわらず、農道を散歩道として使っている人が、「草を刈れ」と、その農家の土地でないところについてクレームを言ってくることもある。

山中 非農家の人にとっては、それ

が当然のように思えるんでしょうね。
齋藤 そうなんです。こういった農家がしている事は景観を良くすることにもつながっているし、もし金銭的な価値で評価したなら、かなりの額に相当する様々な効用を地域にもたらしているはずなんです。農家自身も当然のようにやってきたことなので、お金云々と言うわけではないのですが、農家はなんて評価されないボランティアをしているんだろーなと思っちゃたね。こういったことはないですか？

山中 ボランティア的な作業も多少はあります。でも、供給責任というのもありますからね。といつても、うちの会社は種を買ってきてハウスの中で育苗している工場のようなものなので齋藤さんとは視点が少し違うかもしれません。

齋藤 田んぼで水を使うのが農家だから、それに関わる作業は農家がある。それも分からなくもないのですが、農村というのは、お互いを気にとめ合うことで一つの共同体として存在できていると思うんです。お金儲けという意味では農家が行っていることは合理的ではないかもしれませんが、村という地域があつて生かされていると考えると合理的なんですよ。そういった地域で生きていくには、やはり地域の歴史や人間関係に



も配慮しないといけないし、当然のように村の中にあるものでも管理している人がいるわけで、当然だと受け止めてはいけないと思うんですけどね。

山中 非農家の人は農業が抱えている事情を知らないわけだし、どう捉えたらいいのか難しい問題ですね。

齋藤 今のようない状況になったのは、やっぱり物が溢れ過ぎていて、みんな小金持ちになつて何でもお金で取引できるというような感覚を持っているからなのかもしれないですね。それに、まれにあるクレームの内容からも感じるのですが、一般的な価値観として工業製品と農産物が同じ

秤で計られ過ぎていような気もしています。部品それぞれに個性があったらいけない、それが工業製品ですよ。でも農産物の場合は、お天道様相手ですし、実質的に100%同じものはないわけです。でも、そういう風な認識はされていない。その辺りの線引きはどうなっているんでしょうね。

山中 うちの商品の場合で考えると工業製品という考え方は必要なんです。個人的には、苗は品質が安定しない工業製品だと思つています。もちろん天候に左右されることもあるんですが、基本的に受注生産ですし、顧客のリクエストに100%答える

今月のホスト

齋藤 碌 (26歳)

出身 身：京都府南丹市
 属：(有)ジェイ・ウィングファーム（愛媛県東温市）
備考 考：1981年生まれ。愛媛大学農学部在学中からアルバイトとしてジェイ・ウィングファームに勤務。2003年同大学卒業後、(社)国際農業者交流協会の海外派遣プログラムに参加し、米国の畜産農家で2年間研修。05年帰国、ジェイ・ウィングファームに復帰。現在、入社3年目。主に生産部門を担当。

ことを目指して取り組まないといけない。そうすると結果的にこういう考え方になるんですよ。育苗業界はそういう世界になりつつあると思います。

齋藤 顧客の要望に応えるという点は、うちの農場も同じです。契約栽培をしていますし、お金もいただくわけで顧客が満足するようなものを出さないといけない。それを実現できるように調整するのがプロの仕事だと思つています。ただ、農業やそれに付随する根本的な点、例えば農業が効率と非効率を合わせ持つている点などについて、あまりにも理解されてないなと感じるんです。

山中 うちは農家さん相手の商売でもあるので、その点で顧客の反応に違いがあるのかもしれませんがね。

齋藤 僕は、農業は文化などすべての根源だと考えています。祭りもそうですね。農業が地域の景観やコミュニティもつくってきた。その中で知恵を学んですべてを総括的に管理しているのが百姓なんだと思います。だからこそ利益追求の範囲だけで農業は語れない。次の世代には農業を通じて、こうした生き方や哲学なども伝えていきたいと思っています。

山中 将来のビジョンも具体的に描かれているんですか？

齋藤 いえ、今はとにかく誇りを持った百姓になりたいというだけで、将来までは考えられないですね。ただ……話が逸れるんですが、音楽好きの百姓でバンドを組めたらいいなとは思っています（笑）。

山中 バンドですか（笑）。

齋藤 ハイ。社長ともよく話すんですよ。海外農業研修では米国のカウボーイのところにお世話になったわけですが、彼らは月に1度、ロデオ大会のようなイベントを開いて、その晩はカントリーバンドも呼んでみんなで踊ったりする。それが格好いいんですよ。そういう明るい文化が日本の農業にもあっていいんじゃないかな

いかと思うんです。

山中 日本の農業に、そういった華やかさはないですよ。

齋藤 カウボーイソングというのがあるんですが、肉体的にもきつくて危険も伴う仕事をしているカウボーイのこと、要するに百姓のことを歌っているんです。だったら現代の日本の百姓について歌ってもいいんじゃないのかな。こうして自分たち自身も楽しみながら農業のことを伝えられたら百姓のイメージも変わると思うんですけどね。

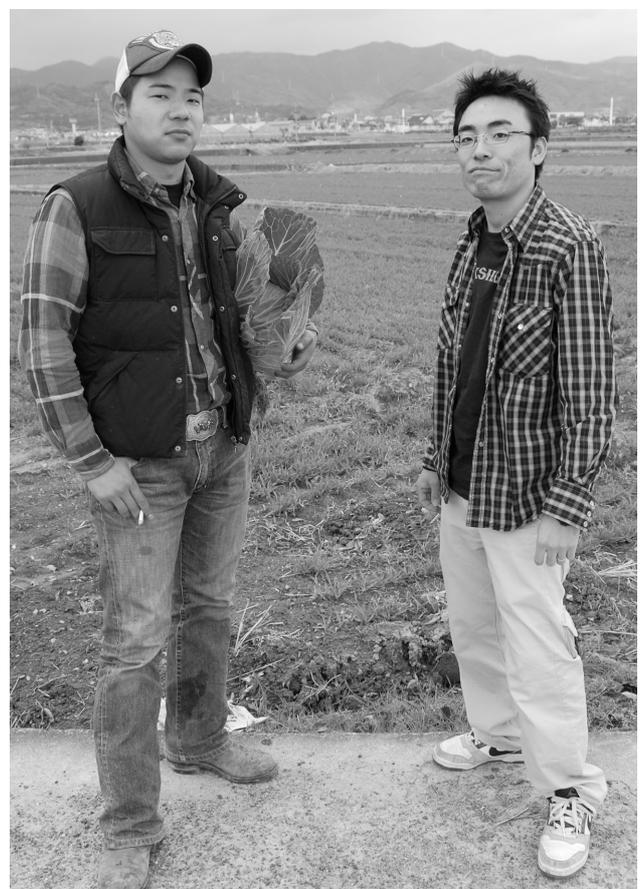
山中 格好良い農業、いいですね。いまだに別の業界の人に農業関係の仕事をしていると言うと「3K」という風に見られますから。

齋藤 仕事については、あまり先のことを考えても煮詰まってしまうので、今は目の前にある事を一生懸命やるだけです。そのうちに道が開けてくるんじゃないかと思っています。

山中 ちなみに、日頃、意識して努力していることは何かありますか？

齋藤 とにかく観察することですね。それと、肥料設計にしても機械の使い方にしても、ただ上の人の指示通りに動くのではなくて、仕事の目的と照らし合わせてみて、より良い方法がないかを試験しながら考えるようにしています。

山中 凄いですね。それは生産効率



化の原点ですよ。それにしても、僕は今まで組織の中で働いてきた人間なので、齋藤さんほどのポリシーや何かやってやろうという気概はなかなか持てないですね。それに、育苗業界自体の売り上げはどんどん伸びているんですが、それはホームセンター向け、要するに家庭菜園用なんです。危機的な農業があつて育苗業界が成り立っているようなところもあるんで、僕としては素直に喜べない状況でもあるんですよ。

齋藤 定年後に農業をしたいという人が増えている中で竹内園芸さんが趣味のなところもカバーしてくれているわけですから、良いことなんだ

と思いますよ。それに山中さんは農業に携わるようになって1年ですよ。まだこれからですよ。うちの社長も、「コメづくりをしてきたって言っても、まだ20数回だけだしなあ」って、よく言ってます。

山中 そういう感覚は麻痺してますね。年間何百万、何千万本という苗を出荷していますから。でも、今日来てみて、現場の感覚は忘れたいくらいな気がしますね。

齋藤 やっぱ現場で汗をかかないと。
山中 そうですね。今日はありがとうございました。

齋藤 こちらこそ、ありがとうございました。